

パキスタンあれこれ（１）～「家畜王国」・バルチスタン

バルチスタン州は面積 34.7 万 km² でパキスタン全体の約 44% を占める国内最大の州ですが、雨が少なく乾燥しているためその多くは植生がまばらな山岳地や沙漠地帯です。耕地面積は約 5% ですが、作付けされるのはその半分程度しかありません。乾燥地に共通していえることですが、ここバルチスタンでも畜産の重要性が大きく、耕作に適さない広大な土地は放牧地（Grazing Land）として利用されています。1986 年の畜産センサスによれば、バルチスタン州におけるヤギおよび羊の頭数は 730 万頭および 1,110 万頭で、これはパキスタン全体の 24% および 48% にあたります。ヤギ・羊のほか、牛 110 万頭、鶏 600 万羽、ラクダ・ロバ・馬等が 75 万頭と続いています。それに対して人口は、1990 年の推定値で 700 万人程度（パキスタン全体の約 6%）しかなく、バルチスタンは人口よりもヤギや羊の頭数の方が多い「家畜王国」と言えます

一口にヤギや羊といってもいろんな種があり、羊毛を取るには Harnai 種、上質のマトン肉は Baloch 種及び Bivragh 種とされています。牛では、Kachhi 平原の Bhagnari 種は農耕用に優れており、Lasbella 地区の Red Sindhi 種は高温・乾燥気候に順応した最上級の乳牛種として有名だそうです。また、バルチスタン州では農業省とは別の組織として畜産省があり、新品種の導入や在来種の改良研究等も行われています。

放牧地といっても豊かな牧草地が広がっているわけではなく、写真にあるような Rangeland と呼ばれる貧しい植生の土地がほとんどです。Rangeland は「self-regenerating and self-maintaining vegetation used for livestock grazing」と定義されています。家畜飼料の 80% 以上を Rangeland に頼っている、という報告例（FAO の調査）もあります。そのほか飼料としてはアルファルファ、メイズ、ソルガム、大麦等の牧草や作物残渣（収穫後の小麦等）も使われます。畑の雑草もここでは貴重な飼料の一つだそうです。

Rangeland を試験的にフェンスで囲って放牧する家畜をシャットアウトしている地区が Quetta 近郊にあります。乾物生産量は周辺地域とは格段の差があり、年間雨量が 200～300mm のところでも植生回復のポテンシャルがあることがわかります。実際には Rangeland をフェンスで囲うのは地域住民や遊牧民との関係や経済的問題もあり難しいようです。住民参加型で地元の人達に理解してもらい、住民を巻き込んだ形で Grazing Control をすることで、植生の回復を図りながら放牧地の荒廃を防ぐことがこのような乾燥地での Sustainable Grazing につながるのでは、と思います。



植生がまばらな Rangeland



放牧中のヤギ 羊の群

パキスタンあれこれ(2) ~ イスラマバードの金曜市場

以前、第6号でシリア・ダマスカスのスーク・ジュマを紹介したが、今回はパキスタンのジュマ・バザール(金曜市場)です。ジュマは金曜日、バザールは市場で、文字通り休日の金曜日だけ開かれるマーケットのことである(ダマスカスの場合は金曜日以外も開いている常設のスークのようですが...)。写真はパキスタンの首都イスラマバードで見かけたもので、Holiday Inn Hotel(数年前まではIslamabad Hotel という名前だった)から歩いて数分の所にある。

ここは、ふだんは何もなくながらんとしているが、毎週金曜日になるとテント屋根のいろいろな店が並ぶ。ちょうど、日本でも日曜日等にみられるフリーマーケットによく似ている。主に野菜や果物の店が多いが、そのほかスパイスや衣類、おもちゃ、雑貨等も売っている。衣類、雑貨等はコンクリートで間仕切りされたブースに、野菜や果物はその隣の空き地にそれぞれの店が開く。

季節によって変わるが、主な野菜類はタマネギ、ジャガイモ、ダイコン、ニンジン、ナス、キュウリ、スイカ、キャベツ、カリフラワー、ホウレンソウ、トマト、オクラ、トウガラシ等である。果物ではマンゴー、パパイヤ、オレンジ、ライム、バナナ、リンゴ、アプリコット、ザクロ等々。まれにイチゴもみられる。また、パキスタン料理になくてはならない香辛料は、写真にあるように粉にしたものを円錐状に山盛りにして売っている。

イスラム圏におけるスーク・ジュマは各地に見られるもので、ここは都市・農村・沙漠を結ぶ人・物・情報のネットワークとして機能している。ここに来れば、地域の文化や伝統の一端をかいま見ることができ、我々の現地調査にとっても有益な情報が得られることも多い。



カリフラワー売りのおじさん



女性用のショールの店



いろいろなスパイス



リンゴ、パパイヤ、メロンなどの果物

パキスタンあれこれ(3) ~ 海外出稼ぎとドバイ・シンドローム

パキスタンの人口一人当たりの GDP は 400 ドル強、未熟練労働者の月給は 1,000~3,000 ルピー(約 3,000~9,000 円)程度である。これと地理的要因もあいまって、物質的、金銭的な豊かさにひかれて中東の産油国への出稼ぎ希望者は後を絶たない。産油国では自国の 10 倍稼ぐことも可能である。また産油国側にとっても、もともと人口が少なく労働力が不足していることや、産油国のアラブ人が原油採掘現場、道路・住宅建設、農場での作業等の 3 K 労働を嫌うこともあって需要と供給が合致している。

パキスタンと中東(アラビア半島)との位置関係を地図で確かめてみるとほんの目と鼻の先で、実際にカラチ~ドバイ(UAE)までの距離とカラチ~イスラマバード(パキスタンの首都)はほぼ同じである。宗教も同じイスラム教であり、言葉も多くのインド人、パキスタン人労働者がいることから、言語人口で言えばヒンディー語、ウルドゥ語(話言葉はほとんど同じ)が多数派であり、そういう点では日本に出稼ぎに来るよりもカルチャーショックもなく、問題は少ないと思われる(アラブ人と日本人の人の使い方を比べると、いちがいに言い切れないが.....)

最盛期は過ぎたとはいえ、出稼ぎ労働者の海外からの送金はパキスタンの経済にとってもいまだに重要である。ただ出稼ぎは豊かさをもたらす明るい面ばかりではなく、「ドバイ・シンドローム」と呼ばれる影の部分も合わせ持っている。ここでは「ドバイ」は出稼ぎ先の代表として使われている。まず出稼ぎをするためには普通、エージェントに多額の手数料を払わなければならない、借金漬けになり心理的に不安になる。次に晴れて出稼ぎに行けても、残された家族は一家の大黒柱の不在によって家庭内が荒れたり、送金によって豊かになり浪費癖がついてくる。さらに出稼ぎ者の帰国後はこうした自分の家庭の崩壊に愕然とし、自身も高額所得に慣れすぎて落差のあるパキスタン社会になかなか復帰できない.....

先日、出稼ぎ供給側のパキスタンと受入れ側の産油国 UAE に相前後して短期出張したときに感じたことがある。UAE の通貨はディルハム(DH)で 1 DH=30 円程度、一方パキスタンはルピーで 1 ルピー=3 円程度。したがって、10DH がほぼ 100 ルピーに相当する。日本円に換算すれば同じ 300 円でも、パキスタンで 100 ルピーあればなかなか使い出があるが、UAE の 10DH はすぐに消えてしまう。つまり物価がそれだけ違う、ということだが、出稼ぎ中に高額所得、高額消費に慣れてしまうと、出稼ぎから帰ったときにそのギャップにとまどうのでは、と思う。得たものに対して失ったものの大きさは人それぞれであろうが、いずれにしろなくしてから初めてその大切さに気づく、というのは人間の哀しい性ではある。



パキスタンの果物屋



UAE のパキスタン人労働者



地方都市の街並み



Abu Dhabi の街並み